

フッサール生活世界の現象学
—— 生活世界の存在論の課題と射程をめぐって ——

Husserl's Phenomenology of Life-World :
On the Problem and the Range of Ontology of Life-World

石田三千雄

はじめに

『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(以下この書を『危機』と略記する)¹はフッサールの後期を代表する重要な著作であるだけでなく、現代世界の危機²を、「学問の危機」と捉え、「哲学の理念」にまで立ち帰ってそれを解明し、それにフッサールなりに真剣に対処しようとした著作である。ラントグレーベによれば、『危機』は、現代の世界状況の中での現象学の歴史的必然性を立証するはずのものであり、その状況に直面した哲学者の課題を扱っている³。われわれは今日でもこの書から多くを学ぶことができ、現代における哲学の使命を考える際に、この書は一つの指針となるであろう。その際、生活世界ということで指示される問題を、フッサールが広く人間の活動としての「実践」(Praxis)の観点から捉えている限り、生活世界に関わる問題はすべて実践哲学的な問題である⁴。

フッサールは「時代の危機」を、その根底にある「学問(哲学を含む)の危機」として捉え、改めてギリシアで生まれた哲学と科学の根本的あり方に眼を向ける。そこで明らかになることは、近代はギリシアで生まれた哲学と科学を受け継いだが、その際、近代の理性は科学に奉仕する理性(科学的合理性)へと制限されたということである。この科学の合理性が科学の客観主義を導いている。ラントグレーベによれば、歴史的な回顧的省察(Rückbesinnung)によって、危機の根は近代の諸学問の客観主義の中に求められねばならないというテーゼが根拠づけられる。フッサールが客観主義と呼ぶものは、精密な数学的自然科学によって、しかもこの自然科学を

本論文は平成 26 年度夏期京都ヘーゲル讀書会の発表原稿を基にしたものである。

¹ Husserl, Edmund, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentalen Phänomenologie. Einleitung in die phänomenologische Philosophie*. Herausgegeben von Walter Biemel, Haag 1962. 以下、『危機』の頁を本文中で示すときは、フッサリアーナの巻数である VI と頁数を括弧で記す。

² フッサール自身は現実政治には関わらず、あくまで哲学の内部で危機に対処しようとした。オルトによれば、『危機』に時代情勢、つまり具体的な文化的、社会的、政治的な情勢についての発言が見られないことは奇妙であるが、フッサールは社会的、文化的、政治的危機を十分に経験し、見ていた。しかし、フッサールはそれを直接に自分の哲学的分析の対象にしなかった。現代にまで至る近代において生じた哲学と科学〔学〕の自己理解そのものの中に、彼は危機の本来的な動機を見ている。学という文化(学問性)の危機の分析が『危機』の主題である。Vgl. Orth, Ernst Wolfgang, *Edmund Husserls >Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendentalen Phänomenologie<. Vernunft und Kultur*, Darmstadt 1999, S.12-13.

³ Vgl. Landgrebe, Ludwig, *Lebenswelt und Geschichtlichkeit des menschlichen Daseins*, in: Bernhard Waldenfels, Jan M. Broekman und Ante Pažanin(hrsg.), *Phänomenologie und Marxismus. Band 2: Praktische Philosophie*, Frankfurt am Main 1977, S.23.

⁴ Vgl. Landgrebe, L., *Lebenswelt und Geschichtlichkeit des menschlichen Daseins*, S.13.

手段として技術的に支配可能であるような世界が唯一の真の世界であるという確信のことである⁵。科学の客観主義は生〔生活〕⁶の意味喪失をもたらした。ヘルトによれば、『危機』でフッサールは近代におけるわれわれの世界とわれわれの生の「科学化」(Verwissenschaftlichung)によって導かれた「意味の危機」(Sinnkrise)のなかで、一つの適切な診断を下すことのできる唯一の審級として、超越論的現象学を提示した⁷。

フッサールが見た時代の危機は現代においてより先鋭化しているであろう⁸。諸科学の客観主義によって忘却されてきたのが、生活世界である。生活世界は諸学問に先立って人間がそこで生きている地盤であり、学問を含めたあらゆる実践が行われ、その成果が蓄積されていく世界である。この世界は「主観的-相対的」(subjektiv-relativ)でありながらも、そのうちに普遍的構造をもった具体的世界である。この世界の構造を分析するのが生活世界の存在論である。フッサール自身は、この存在論の研究を超越論的現象学への通路と考える。この生活世界の存在論を通じてフッサールは最終的に超越論的現象学(より一般的には超越論哲学)へ向かおうとする。クレスゲスによれば、生活世界の理論と共に、この生活世界から出発して、超越論的現象学へと進んでいく一つの新しい道が歩まれる。生活世界の理論は、フッサールの現象学の体系のなかでかつて『イデー II』で構想された「領域的存在論」(regionale Ontologie)が占めていた場所に登場する⁹。

以下、われわれはまず、近代の客観的諸科学が生活世界を忘却し、それが生〔生活〕の意味喪失をもたらし、学問の危機となって現れていることを論じる(第1章)。科学の客観的世界の根拠づけから生活世界概念が導入され、生活世界が科学に対する基底として機能する、根源的明証の領域であることが論じられる(第2章)。次に具体的普遍としての生活世界のあり方が論じられる(第3章)。最後に、生活世界の構造の分析を通じて生活世界の存在論が提出され、エポケー、生活世界のアプリオリ、超越論的現象学との関係での生活世界の存在論の課題と射程が論じられる(第4章)。

1. 学問の危機、科学の客観主義および生活世界の忘却

⁵ Landgrebe, L., *Lebenswelt und Geschichtlichkeit des menschlichen Daseins*, S.23.

⁶ “Leben”には「生、生命、生活」といった幅広い意味がある。われわれは、主に「生活」という訳語を使うが、コンテキストに応じて「生」という訳語も使う。

⁷ Vgl. Held, Klaus, *Einleitung zu “Edmund Husserl, Phänomenologie der Lebenswelt (hrsg. von Klaus Held.)”*, Stuttgart 1986, S.40.

⁸ フッサールにとっての危機は「ヨーロッパの精神とその諸学問の危機」であったが、ラントグレーベの言うように、現代はそれ以上の危機を抱えている。危機は現代世界全般の危機となっている。なぜなら、ヨーロッパの学問と技術から出発して、世界は今日、一般的な相互依存の一つの世界へと再形成され、統合されてしまったからである。今日の言葉でいえば、グローバル化された世界の危機がわれわれの前にある。ラントグレーベはさらに、原子力の脅威や、環境破壊や「成長の限界」といった具体的問題を挙げている。これらはフッサールが知らなかった問題であるが、もしフッサールがこれらのことを体験していれば、彼にとっては客観主義を生活世界の忘却とするテーゼが立証されたことになるであろう、とラントグレーベは述べている。Vgl. Landgrebe, L., *Lebenswelt und Geschichtlichkeit des menschlichen Daseins*, S.23, 26.

⁹ Vgl. Claesges, Ulrich, *Zweideutigkeit in Husserls Lebenswelt-Begriff*, in: Ulrich Claesges und Klaus Held (hrs.), *Perspektiven transzendentalphänomenologischen Forschung. Für Ludwig Landgrebe zum 70. Geburtstag von seinen Kölner Schülern*, Den Haag 1972, S.93, 99.; Vgl. Landgrebe, L., *Lebenswelt und Geschichtlichkeit des menschlichen Daseins*, S.30.

フッサールは「学問の危機」(Krisis einer Wissenschaft)¹⁰を、「その真の学問性、すなわち学問が自らの課題を立て、その課題をはたすために方法論を形成してきたその仕方の全体が疑問になったこと」(VI,1)に見ている。そしてフッサールの見るところ、哲学は、現在、懐疑や非合理主義や神秘主義に屈服しそうになっている。しかしだからといって、学問一般や、したがってまた、実証諸科学が危機に陥っているとまで言えるかどうか、とフッサールは自問する。というのは、学問一般の中には、厳密で、きわめて大きな成果を挙げている、学問性の模範とされる純粋数学や精密自然科学も含まれているからである(Vgl. VI, 1)。またこれに精神科学を加えても、諸学問分野の学問性の厳密さ、すなわちそれらの理論的作業と、永く承認せざるをえないであろう成果の明証には疑いをいれる余地はない。これら一群の諸科学の学問性と比べると、現代の哲学の「非学問性」はフッサールにとって際立って見える(Vgl. VI, 2)。そこで、フッサールが考察の出発点にしようとするのは、諸学の学問性の意味を犠牲にすることなく、しかもすべての学問の学問性を、真剣で当然なすべき批判に服させようとする動機を生み出す「現代文化の危機」についての一般的な訴えと、その際学問に帰せられる役割である(Vgl. VI, 3)。

フッサールは、学問一般が、「人間の生存」(das menschliche Dasein)にとって何を意味してきたか、また何を意味することができるのか、という点に注目する。フッサールによれば、19世紀の後半には、近代人の全世界観は、もっぱら実証科学によって徹底的に規定され、また実証科学に負う「繁栄」によって徹底的に眩惑されていたが、その徹底性とは、「真の人間性」(ein echtes Menschentum)にとって決定的な意味をもつ問題から無関心に眼をそらす、ということであった。「単なる事実学は、単なる事実人(bloße Tatsachenmenschen)をしか作らない」、とフッサールは述べる。この事実学はわれわれの「生存の危機」(Lebensnot)に際して、われわれに何も語ってくれない。この学問は、この不幸な時代にあつて、運命的な転回にゆだねられている人間にとっての焦眉の問題を原理的に排除している。その問題というのは、フッサールによれば「この人間の生存全体に意味があるのか、それともないのかという問い」である(Vgl. VI, 3-4)。

この「人間の生存の意味に対する問い」を、すべての人間に対しても普遍性と必然性とからみて、「一般的に省察されるべきもの」であり、「理性的な洞察からの答えを要求するもの」と、フッサールは考える。そして、ここで問われるのは、結局、人間のおよび非人間的な周囲世界〔環境〕(Umwelt)に対して、「自由な決定によって態度を決める人間」、「自己ならびに自己の周囲世界を理性的に形成するさまざまな可能性をもつ自由な人間」である。「理性と非理性とについて、またこの自由の主体としてのわれわれ人間について、学問はいったい何を語るべきなのであろうか」、とフッサールは問う。単なる「物体科学」(Körperwissenschaft)はこの点について何も語ってくれない。それはいつさいの主観的なものを捨象する。他方、そのすべての学問分野において精神的な存在としての人間、したがってその歴史性の地平における人間を考察する精神諸科学に関しても、その厳密な学問性から、研究者は、あらゆる評価的態度を、すな

¹⁰ フッサールはこの「学問の危機」を「ヨーロッパの人間の根本的な生の危機」の表現と見ている。フッサールには人間の根本的なあり方を「ヨーロッパ的」と考えるヨーロッパ中心主義があることは否定できない。しかし、われわれは人間本性という人類の普遍性を考えたい。

わち主題となった人間性や、その文化形象の理性と非理性へのすべての問いを用心深く排除することが要求される。そうすると「学問的で、客観的な真理」とは、もっぱら「世界が、すなわち物理的ならびに精神的世界が、事実の上で(tatsächlich)何であるかを確定することである」、ということになる。したがって、諸科学はこのように「客観的に確定しうるもの」だけを真理と認めることになる(Vgl. VI, 4)。

科学の客観主義は主観的なものとの関連を断ち切り、客観的真理のみを一面的に強調する考え方である。ヘルトによれば、無制約の客観性という規範が、自明のもの見なされるところに生じるのが「客観主義」という認識態度である。これこそが、近代科学における意味の危機へ導くと同時に、科学化された世界における生きることの意味の危機へと導くものである¹¹。「客観性という理念」が近代の実証科学の全体を支配しているのであり、一般的な用語でいえば「科学」という語義を支配している(VI, 130)。

それでは、このような客観主義はどのようにして生まれてきたのであろうか。フッサールは科学の客観主義の起源を、ガリレイ的な「自然の数学化」に見ている。「ガリレイ的な自然の数学化」によって、新しい数学の指導のもとに、自然自体が理念化されることになる(VI, 20)。『危機』の第9節で論じられるガリレイの自然の数学化を動機づけた思考過程の中に「生活世界」はまず最初に登場する。自然の数学化が行われる、その自然として登場する世界が後に主観的に論じられる生活世界である。この自然としての世界は、「学以前に」(vorwissenschaftlich)、日常的な感性的経験において、「主観的-相対的に」与えられている。われわれは誰でも、自分にとっての「現われ」(Erscheinung)をもっており、この現われは各自にとって現実的に存在するものとみなされている。われわれがそれぞれ存在とみなしているものは食い違っているが、われわれは相互の交渉でこのこととづくに気づいている。しかし、われわれは多くの世界があると思っていないわけではない。われわれは、同じものでありながら、ただわれわれにとって異なっていて現われるにすぎない事物を伴った同じ世界の存在を信じている¹² (VI, 20)。しかし、このとき、これらの現われそのもののうちに、何かわれわれが「真の自然」に帰せざるをえないような内容があるのではないか、ということをフッサールは示唆する(Vgl. VI, 21)。これがガリレイの自然の数学化、さらには自然の理念化を動機づけた思考過程である。

すでにガリレイのもので、「数学的な基底を与えられた(substruiert)理念性の世界」が、われわれの「日常的な生活世界」(alltägliche Lebenswelt)と、すなわちそれだけがただ一つ現実的な世界であり、現実の知覚によって与えられ、そのつど経験され、また経験される世界であるところの生活世界と「すり替えられる」。このすり替えは、ただちにその後継者たち、つまり引き続き数世紀の物理学者たちによって相続されることになった(VI, 48-49)。これはまた次のようにも説明される。「幾何学的な、また自然科学的な数学化」において、「無限に開いた可能的経験のうちにある生活世界—われわれの具体的な世俗生活(Weltleben)の中でたえず現実的なもの

¹¹ Held, K., Held, Klaus, Einleitung zu “Edmund Husserl, *Phänomenologie der Lebenswelt* (hrsg. von Klaus Held.)”, S.47.

¹² これは『イデーン I』で「自然的態度の一般定立」として論じられたものである。Vgl. Landgrebe, L., *Lebenswelt und Geschichtlichkeit des menschlichen Daseins*, in: Bernhard Waldenfels, Jan M. Broekman und Ante Pažanin (hrsg.), *Phänomenologie und Marxismus. Band 2: Praktische Philosophie*, Frankfurt am Main 1977, S.15, 27.

として与えられている世界」に、いわゆる「客観的科学の真理」というぴったり合った「理念の衣」(Idenkleid)が着せられる(VI, 51)。「数学と数学的自然科学という理念の衣」は、科学者と教養人にとっては、「客観的に現実的で真の自然」として、生活世界の代理をし、それを覆い隠すようなすべてのものを包含することになる。この「理念の衣」は、「一つの方法」にすぎないものを「真の存在」だとわれわれに思い込ませる。こうして理念の衣を着せたおかげで、「方法、式、理論」の本来の意味が理解されないままになってしまった(Vgl. VI, 52)。その際フッサールは、数学的自然科学の「技術化」(Technisierung)によって意味の空洞化がいつそう進むことを指摘している。技術化は自然科学に固有な方法すべてをとらえ、方法は技術化されると同時に外面化されるのである(Vgl. VI, 45-48)。

クレスゲスはフッサールの生活世界の理論に、「診断的機能」と「治療的機能」を割り当てている。前述のことからもわかるように、近代の客観的諸科学は(歴史的には)生活世界を地盤(Boden)として成立してきたし、また(体系的には)このような地盤をその変わらぬ意味地盤と妥当地盤として前提している。しかし、近代の客観的諸科学は地盤としての生活世界を忘却してきた。この忘却がヨーロッパの危機の本来の起源である、諸科学の客観主義を定義する。このことを生活世界が示すとき、生活世界は診断的機能を果たす、とクレスゲスは述べる。そして生活世界が諸科学に対して地盤としての役割を果たすことを、クレスゲスは、生活世界の「地盤機能」(Boden-Funktion)と呼んでいる¹³。

2. 科学の客観的世界と生活世界

フッサールの生活世界概念は、アギレが指摘するように、「自然的-存在的な生活世界概念」から、「存在論的な生活世界概念」を経て、「超越論的な生活世界概念」への段階づけ、上昇の中に位置づけられる¹⁴。生活世界を主題化するには、さまざまな仕方があるが¹⁵が、『危機』では生活世界は主に学問の根拠づけを問う学問論的な文脈で、科学の客観的世界との対比で論じられている¹⁶。フッサールは『危機』の第33節で、生活世界をまず「客観的科学の一般的問題の中の部分問題」として扱う。フッサールは、学〔科学〕を「人間の精神の作業」(menschliche Geistesleistung)と位置づけた上で、その作業はあらかじめ共通に与えられている「直観的な生活周囲世界〔生活環境〕」(anschauliche Lebensumwelt)からの出発を前提にしている、と述べる。それは、たとえば物理学者にとっては、彼がその中でいろいろ器具を操作し、測定している周囲世界であり、しかもその中で彼自身もいろいろ行動したり、理論的な思考をしたりしながら、そこ

¹³ Vgl. Claesges, Ulrich, Zweideutigkeit in Husserls Lebenswelt-Begriff, in: Ulrich Claesges und Klaus Held (hrs.), *Perspektiven transzendentalphänomenologischer Forschung. Für Ludwig Landgrebe zum 70. Geburtstag von seinen Kölner Schülern*, Den Haag 1972, S.85-86. 治療的機能については、この論文の最後で触れたい。

¹⁴ Aguirre, Antonio F., *Die Phänomenologie Husserls im Licht ihrer gegenwärtigen Interpretation und Kritik*, Darmstadt 1982, S.88.

¹⁵ Aguirre, A.F., *Die Phänomenologie Husserls im Licht ihrer gegenwärtigen Interpretation und Kritik*, S.87.

¹⁶ アギレは、これを生活世界を「自然科学の忘れられた意味基底」として考察すること、として特徴づけている。Aguirre, A.F., *Die Phänomenologie Husserls im Licht ihrer gegenwärtigen Interpretation und Kritik*, S.87. 堀栄造「後期フッサールにおける生活世界のアプリオリ性」、『哲学・思想論叢』(筑波大学)第4巻、1986年、95-97頁参照。

に含まれていることを意識しているような周囲世界である(Vgl. VI, 123-124)。こうして、学が問いを提出したり答えたりするとき、それらの問いは、その「あらかじめ与えられている世界」(vorgegebene Welt)―まさしくその中でこの問いやその他の生活の実践が行われる―を「地盤」とし、その存立に依拠している(Vgl. VI, 124)。

ところが、ギリシアに起因する新しい人類(哲学的人類、学的人類)は、自然的な生存の認識や真理という理念を作りかえて、「客観的真理」(objektive Wahrheit)という新たに作り出された理念に、あらゆる認識に対する規範というより高い尊厳を与えることになった。そのことに関連して、ついにはあらゆる可能な認識をその無限性のままに包括する「普遍的な学の理念」、すなわち近代の大胆な指導理念が生じることになった(VI, 124)。そこで、フッサールは「学の客観的妥当性と課題全体」を明確に解明するために、差しあたり「あらかじめ与えられている世界」へ問いを遡らせる。この世界はわれわれすべてに自然にあらかじめ与えられている。この世界は、「恒常的に妥当している地盤」(der ständige Geltungsboden)であり、われわれが実践的人間としてであろうと、あるいは学者としてであろうと、「自明性のつねに用意されている源泉」である(Vgl. VI, 124)。

フッサールはこのあらかじめ与えられている生活世界を主題化しようとして、生活世界という題目の下に、「独特の学的な、普遍的な課題」を立てる(VI, 124)。フッサールによれば、生活世界を学的に扱うという主題は、差し当たっては「客観的科学的な主題全体の中での従属的で部分的な主題」であるように見える。この客観的科学的な主題は、一般的に言って、すなわちその実証的個別科学という特殊形態において、その客観的作業がどうしても可能なか理解しがたいものとなっている。そこでフッサールはいったん科学独自の営みから抜け出て、科学を超えたところに立場を占め、それらの理論と成果とを一般的に見渡しながら、他方で研究しつつある学者、また共同研究に携わる学者たちによって行使される行為生活(Aktleben)、その目標設定、その目標のそのつどの達成、さらに達成を行う明証といったものを見渡すことを試みる。その際、学者はつねに処理可能な直観的所与を有する生活世界へとさまざまな一般的仕方で繰り返し立ち帰る。こうして、生活世界の問題、さらには生活世界が学者に対して現に機能し、また機能するにちがいないその仕方は、「客観的科学的な全体の内部にある部分的な主題」にすぎないことになる。というのは、それは「客観的科学的な十全に根拠づけるのに役立つような主題」だからである(Vgl. VI, 124-125)。

しかしながら、客観的科学的な明証的な根拠づけに対する生活世界の機能を十全に問うためには、科学の根拠づけに限定されない、生活世界のいっそう深い根拠づけの機能を問うことが必要になる。そこでフッサールは、生活世界が、その中で生きている人間に対してもっている固有の恒常的な存在意味を問う。フッサールは、「生活世界の存在様式の問題」を、それだけとして立て、すべての客観的科学的な立場からする意見や認識を度外視して、全面的にこの「端的に直観的な世界」の地盤に立ち、そのうえで、生活世界の固有の存在様式に関して、いかなる「学的な課題、すなわち普遍妥当的に決定されるべき課題が生じるかを、一般的に考察しようとする(Vgl. VI, 125-126)。この結果、生活世界は、それ自体としては、「最もよく知られたもの」(das Allerbekannteste)であり、すべての人間生活において「つねにすでに自明的なもの」であり、

その「類型に関しても、経験によってもわれわれになじまれているもの」である、ということが判明する。フッサールはここで生活世界の地平構造を指摘する。生活世界のすべての「未知性の地平」は単に「不完全な既知性の地平」である。すなわち、それはその「一般的類型」に関してはあらかじめ知られている。学以前の生活にとっては、このような既知性で十分であり、また未知性を既知性へもたらし、経験と帰納とに基づいて、そのつどの認識を獲得するその仕方でも十分である(Vgl. VI, 126)。

こうして生活世界はたえず「基底」(Untergrund)として機能しているが、その仕方、つまり生活世界のさまざまな前論理的な妥当が、論理的ならびに理論的真理に対して根拠づけのはたらしきをしている仕方を、フッサールは学的に問おうとする。この生活世界が、それ自体として、またその普遍性からみて要求している学問性は、フッサールによれば、独特なものであって、「単に客観的-論理的ではない学問性」である。この生活世界のもつ学問性を明らかにするためにフッサールは、「客観的真理という理念」と対比される、「学以前ないし学以外の生活上の真理の理念」を考察する。この後者の真理の理念は、純粹な経験の中に、すなわち知覚や記憶などの経験の様態の中にその究極の最も深い確証の源泉をもっている。その確証の源泉となるものは、学以前の世界生活の「単に主観的-相対的な」直観である(VI, 127)。

「客観的真理」へと向かう主題的態度のうちにあるすべての自然科学者にとっては、経験世界(生活世界)は「単に主観的-相対的」という刻印を押されている。彼らの「客観的な」課題設定ということの意味を規定しているのは、それが「主観的-相対的なもの」と対比されるということである。その際、この「主観的-相対的なもの」は克服されねばならないとされる。ひとはこの「主観的-相対的なもの」に、「仮説的な自体存在」を、すなわち「論理的-数学的な真理自体」に対する基体を帰属させることができるし、またそうすべきであるとされる。そしてこの真理自体に、たえず新しいよりよい仮説を立てることによって、つねに経験の確証によってそれを正当化しながら近づくことができる、と考えられる。しかし、自然科学者は、このように客観的なものに関心をいだき、活動しながらも、他方では、「主観的-相対的なもの」は、彼にとってはどうでもよい通過点ではなく、それはあらゆる客観的確証に対して「理論的-論理的な存在妥当」を究極的に根拠づけるものとしての機能をもち、したがってまた「明証性の源泉」、「確証の源泉」としての機能をもっている(Vgl. VI, 128-129)。

以上のことから、「生活世界の主観的なもの」と、「客観的世界」、「真の世界」との対比は、いまや次の点にある。すなわち、後者は「理論的-論理的構築物」(eine theoretisch-logische Substruktion)であり、原理的には決して知覚できず、また原理的にその固有のそれ自体の存在について経験できないものの世界であるが、他方、生活世界的に主観的なものは、すべての点においてまさしく現実に経験しうる、ということによって特徴づけられる、という点に(VI, 130)。こうして、生活世界は「根源的明証性の領域」(Reich ursprünglicher Evidenzen)である。明証的に与えられたものとは、それぞれの仕方、知覚において直接に現前している「それ自身」(es selbst)として経験されるものや、あるいは記憶においてそれ自体として想起されるものである(VI, 130)。

科学の客観的世界と対比される形で、生活世界は一方では直観的に与えられる世界であり、

科学の客観的真理に対する「主観的-相対的なもの」の世界であるとされ、その主観的-相対的なものは克服されねばならないとされる。しかし他方では、それは恒常的に妥当している地盤、自明性の源泉、基底、明証性の源泉、確証の源泉、根源的明証性の領域とされる。生活世界が諸学に対してクレスゲスのいう地盤機能を果たすことを、われわれはここでまず確認しておこう。

3. 具体的普遍性としての生活世界

フッサールはこれまで生活世界と客観的世界を対比させてきたが、34節のe)で両者の本質的結合を論じる¹⁷。「論理的な意味での客観的理論」は、生活世界の中に、したがってそれに属している根源的明証性の中に根を下ろし、そこに基礎を置いている。客観的科学は、ここにその根を下ろしているからこそ、われわれがつねにその中で生きており、科学者としても、さらにまた共同研究者としてもそこで共同に生きている世界に、つまり「普遍的な生活世界」(allgemeine Lebenswelt)に、たえず意味的な関係をもっているのである。しかしその際、客観的科学は、学以前の人たち一個人としても、また学的活動において共同し合うことになる人たちとしても一の作業として、それ自身生活世界に属している(VI, 132)。フッサールによれば、いかなる「理念形態」(Idealität)であろうとも、「人間のつくった形成体」(menschliche Gebilde)であり、人間の現実性や潜在性に本質的に関係し、結局は生活世界のもつ「具体的統一」(konkrete Einheit)に属している(Vgl. VI, 133)。

フッサールは、ここでわれわれが陥るやっかいな状況を指摘する。それは以下のような事情である。われわれは「生活世界」と「客観的-学的世界」を、別々にもっていた。客観的-学的世界についての知識は、生活世界の明証性に基づいている。生活世界は、学的研究者、したがってまた、共同して研究する者にとって、地盤としてあらかじめ与えられている。しかしその地盤の上に立てられていながら、とにかくその建造物は新しく、違ったものである。われわれがおのれの学的思考に沈潜することをやめるならば、われわれ科学者も結局人間であり、ともに生活世界という、つねにわれわれにとって存在し、つねにあらかじめ与えられてある世界の構成要素として存在しているということに、われわれは気づく。そして全学問もわれわれもともに単に「主観的-相対的」な生活世界へと入り込んでしまう(Vgl. VI, 133)。

客観的科学の命題、理論、全体系は、共同作業によって結びつけられた科学者たちの何らかの活動から獲得された形成体である。もっと正確にいえば、以前の活動の成果がつねにあとのそれの前提をなすような、諸活動の継続的な構築から獲得された形成体である。これらすべての理論的成果は、生活世界に対する妥当性の性格をもち、そのようなものとして生活世界の「在庫」(Bestand)にたえず加わりながら、あらかじめすでに生成する学の可能的作業の地平として生活世界に属している。それゆえ、「具体的な生活世界」(konkrete Lebenswelt)は、「学的に真の世界」に対してはそれを「根拠づける地盤」であるが、それと同時に、生活世界独自の「普遍

¹⁷ Aguirre, A.F., *Die Phänomenologie Husserls im Licht ihrer gegenwärtigen Interpretation und Kritik*, S.94-95. アギレは両者の「止揚」(Aufhebung)という言い方をしている。

的具体相」(universal Konkretion)においては学的に真の世界を包括するものである(Vgl. VI, 134)。

「客観的に真の世界」と「生活世界」との逆説的な相互依存関係は、両者の存在様式を謎めいたものにする。したがって、われわれ自身の存在をも含めて、あらゆる意味での真の世界は、この存在の意味に関して謎となる(VI, 134)。それは、単に主観的な相対性を客観的-論理的理論によって克服したように外見上見えるが、この「客観的-論理的理論」も、人間の「理論的実践」としては「単に主観的-相対的」でしかないものに属していると同時に、また主観的-相対的なものの中にその前提を、すなわちその明証性の源泉をもたねばならない、という逆説である(VI, 135-136)。こうして、客観的科学の単なる基礎の問題にすぎないと思われるものや、客観的科学の普遍的問題の部分問題にすぎないと思われるものが、実はそれこそ固有の、最も普遍的な問題であることが、明らかになった(VI, 137)。

この事態をわれわれはどう考えたらよいであろうか。クレスゲスは、生活世界が学を含むものとして規定されるようになると、生活世界がもともと学に対してもっていた地盤機能が疑わしくなると考える。つまり、客観的学とそれが取り扱う真の世界の地盤となっているのは、完全な具体相における生活世界ではない。とすれば、一定の範囲の生活世界的明証が一定の生活世界的実践、つまり学という理論的-論理的実践の地盤になっていると言わなければならない。なぜなら、生活世界が学に対して地盤機能を果たすということの意味は、生活世界が学の妥当性を基づけるということであって、学が生活世界の完全な具体性のなかに事実上含み込まれてしまっていることではないからである¹⁸。そこでクレスゲスはこの事態を解明するために、生活世界に三つの概念を区別する。(1)狭い意味での生活世界。生活世界のこの意味は、客観的学およびそれが対象としている世界との対照によって得られたものである。このような意味での生活世界に当てはまることは、学だけにとどまらず、ありとあらゆる目的世界、あらゆる実践的世界(特殊世界)の根底にはこの生活世界が存在しているということである。(2)特殊世界。これは、或る主導的な目的理念によって、(1)の生活世界を基礎として打ち建てられたものである。客観的学が対象としている世界もまた、このような意味での特殊世界であると考えることができる。(3)最も広い意味での生活世界。この生活世界は、その「全具体相」のなかに、(2)の特殊世界をすべて包摂し、さらには(1)の狭い意味での生活世界をも包摂する¹⁹。

具体的普遍性としての生活世界は、クレスゲスの分類で最も広い意味での生活世界である。しかし、クレスゲスによれば、このような生活世界には、それに対してその世界が与えられるような経験主体は存在しえない。完全な具体相において考えられた生活世界には、生活世界を経験する主観が欠けている。したがって、この場合には、生活世界は、生活世界の経験主観に関係づけられていないために、主観の相関者として主題化されないし、地平としても主題化されない。このような最も広い意味での生活世界は、哲学的反省に対してしか存在しない。フッサールはこの最も広い意味での生活世界を、「事物の一切」、「生活世界的対象の宇宙」、「全世界」(Weltall)と名づけている。そうすると、この生活世界は或る種の高次の段階で、それ自体で存

¹⁸ Claesges, U., Zweideutigkeit in Husserls Lebenswelt-Begriff, S.88.

¹⁹ Claesges, U., Zweideutigkeit in Husserls Lebenswelt-Begriff, S.89.

在する世界、存在するものの総括(Inbegriff)ということになる²⁰。

クレスグスが提起したこの問題にわれわれはどう対処したらよいであろうか。われわれはこの問題に次章(4.2の(2))で取り組むことにしたい。

4. 生活世界の存在論と超越論的現象学

4.1 生活世界のアプリアリ

フッサールは生活世界を主題として扱う新たな学を構想する。この新たな種類の学の研究野に接近するには特有の方法が必要とされる。この方法は、現象学のエポケーという方法である。それは多くの歩みに区分され、この歩みの一步一步がエポケーという性格をもつ²¹。すなわちそれは、「自然的で素朴な、とにかくすでに遂行されつつある妥当性を差し控える」という性格をもっている。「最初に必要なエポケー」、すなわち最初的方法的な歩みは、「あらゆる客観的科学に関するエポケー」である。それは、単に客観的科学を「捨象すること」(Abstraktion)を意味するだけではない。それは、「いっさいの客観的科学の認識とともに遂行することに関するエポケー」、「客観的科学の真理や虚偽に関心をもつようなすべての批判的な態度決定に関するエポケー」、しかも「客観的世界認識というその指導理念に対してさえ態度決定をエポケーすること」である。要するに、われわれは客観的、理論的関心全体に関してエポケーを遂行し、客観的科学の学者としてだけでなく、知識を求める者としてのわれわれにも特有な目的追求や、行為のすべてに関してエポケーを遂行するのである(Vgl. VI, 138-139)。

生活世界は、「客観的科学に対するエポケー」によって、「普遍的な学的主題」として開示される。生活世界は、われわれが「われわれの学以前の、また学以外の生活において経験し、また経験されたものを超えて経験可能であることを知っているような空間時間的事物の世界」である。われわれは「世界地平」を、「可能な事物経験の地平」としてもっている。その場合の事物とは例えば、石、動物、植物であり、また人間であり、人間の形成物である。これらすべてのものは、そこでは「主観的-相対的」である(Vgl. VI, 141)。ここでフッサールが生活世界を地平として特徴づけていることに再び注目しよう。

生活世界はその「まったき相対性」のうちにありながら、やはりそれなりの「普遍的構造」(allgemeine Struktur)をもっている。この場合、すべての相対的存在者がそこに結びつけられているこの「普遍的構造」それ自体は、「相対的ではない」。われわれはこの構造を普遍性において注目し、しかるべき慎重さをもって、決定的なかたちで、またすべての者に同様に理解されるように確定することができる。ここで重要なことは、「生活世界としての世界」は、すでに学に先立って、客観的諸科学が前提にしているのと「等しい構造」をもっている、ということである。

²⁰ Vgl. Claesges, U., *Zweideutigkeit in Husserls Lebenswelt-Begriff*, S.96-97.

²¹ アギレによれば、このエポケーは大きくは二つの歩みに分かれる。一つは、客観的科学に関するエポケーである。しかし、生活世界を哲学的に主題にしようとする反省は、学以前の-直観的世界にとどまることはできない。というのは、その世界は依然として存在の普遍性の契機であるからである。それゆえ、それも還元を必要とする。そこに第二の歩みが生じる。Vgl. Aguirre, A.F., *Die Phänomenologie Husserls im Licht ihrer gegenwärtigen Interpretation und Kritik* S.113.

ある。この構造は、客観的諸科学が、「それ自体で存在する世界」、「真理それ自体において規定されている世界」の「基礎構造」(Substruktion)と一つのものとして、「アприオリな構造」として前提にし、アприオリな諸学において組織的に展開してみせているものである²²(Vgl. VI, 142)。

「生活世界的アприオリ」の基礎の上に立って、「数学的アприオリ」や「その他のすべての客観的アприオリ」といった、より高い段階の意味形成や存在妥当が成立する。そしてその存在妥当を成立させるのは「或る種の理念化」の作業である(VI, 143)。差しあたって、「普遍的な純粋に生活世界的なアприオリ」という理念に近づくためには、そのようなアприオリを、ともすればそれとすり替えられる客観的アприオリから原理的に切断すること(Abscheidung)が必要である。これがすでに述べられた、「すべての客観的諸科学の最初のエポケー」である(VI, 143-144)。このエポケーによって得られる洞察は、「客観的-論理学的段階の普遍的アприオリ」—数学的ならびにその他のすべてのアприオリな諸学のアприオリ—は、それ自体それに先立つ普遍的アприオリ、すなわちまさに「純粋な生活世界のアприオリ」に根ざしている、という基本的な洞察である。生活世界に固有な、アприオリな学において展開されうるこのアприオリへ立ち帰ることによってのみ、客観的-論理学的諸学という、アприオリな諸学は、真に徹底的な、厳粛な学的根拠づけを獲得することができる(Vgl. VI, 144)。

4.2 生活世界の存在論の課題と射程

(1) 生活世界の存在論と生活世界の現象学

フッサールは、『危機』の第36節、37節および51節で、生活世界を主題的に扱う学として生活世界の存在論を構想している。この学は前述の「生活世界のアприオリ」、つまり生活世界の「普遍的なもの」、「不変なもの」に注目する。フッサールはこの学の探求を次のように進める。われわれが、生活世界のうちで、「あらゆる相対的なものの変移のうちにあっても、不変なままにとどまるもの」、つまり「形式的-普遍的なもの」(das Formal-Allgemeine)を求めるとき、そこで見て取れることは、世界とは、「事物の一切」(das All der Dinge)、すなわち空間時間性という世界形式の中で、二重の意味で(空間的な位置と時間的な位置に従って)場所的に配置されている事物、つまり「空間時間的な存在者の一切」である、ということである。こうしてここに、これらの存在者の、「具体的に普遍的な本質学」(eine konkret allgemeine Wesenslehre)として理解される「生活世界的存在論」(lebensweltliche Ontologie)という課題が生じることになる(Vgl. VI, 145)。しかしながら、フッサールはここで、その課題にとどまらないで、よりはるかに大きな課題、しかもその課題自体をも含む課題に進む。フッサールはこの課題を、「同じように生活世界に本質的に関わるが、しかし存在論的ではない新しい主題論」であると述べる。フッサール

²² アギレによれば、生活世界の直観的性格にもかかわらず、生活世界は「形式的-普遍的な、不変の、したがって学問を可能にさせる構造」を提示する。ここには二種類のアприオリが見られる。「即自的に存在する世界に関係づけられるアприオリ」とこのアприオリに先だつ「生活世界的アприオリ」が存在するのである。そして、このアприオリの拘束的規範は、主観的-相対的な経験事物である生活世界的事物の構造に関係づけられるのである。Vgl. Aguirre, A.F., *Die Phänomenologie Husserls im Licht ihrer gegenwärtigen Interpretation und Kritik* S.123.

ルはこの主題論への道を切り開くために、一つの「一般的な考察」(allgemeine Betrachtung)を、しかも生活世界に目覚めて生きている人間として(実証科学性が混入することをすべて防ぐエポケーの内部で)行う(VI, 145)。

クレスゲスよれば、生活世界の存在論を作り上げてから超越論的態度に移行するとすれば、この存在論が提示した生活世界のアプリオリを構成分析に対する超越論の手引きとして用いることができる。この意味で生活世界は超越論的現象学に対して「手引き機能」をもつ。存在論的に把握された生活世界についての学、つまり生活世界の存在論は、かつての領域的存在論と同様に、この手引き機能を担う。したがって、生活世界の存在論は領域的存在論と同じものとみなされる。このとき、クレスゲスによれば、生活世界は総括(Inbegriff)という性格をもつ。総括としての世界を、幾つもの領域に区分して、その一般的構造を問うのが領域的存在論である²³。フッサールは第 37 節で生活世界を超越論的現象学的に考察する新しい課題を立てていることがわかる。しかも、その課題は生活世界の存在論の課題を包括するものである²⁴。

(2) 生活世界の一般的考察

前述の生活世界の一般的な考察は、「存在者の宇宙」(das ontische Universum)である、「あらかじめ与えられた世界」がわれわれにとって主題となりうる、さまざまな可能な仕方の本質的相違を明らかにするという機能を同時にもつ。生活世界は、その世界の中に目覚めて生きているわれわれにとって、「いつもすでにそこにあり」、「あらかじめわれわれにとって存在し」、理論的であれ理論以外であれ、「すべての実践のための地盤」である。世界は、目覚め、つねに何らかの仕方で実践的な関心をいだいている主体としてのわれわれに、たまたまあるときに与えられているというものではなく、あらゆる「現実的および可能的実践の普遍的野」として、「地平」として、あらかじめ与えられている。「生(生きること、生活)」(Leben)とは、たえず「世界確信の中に生きること」(In-Weltgewißheit-leben)である。「目覚めて生きる」(Wachleben)とは、「世界に対して目覚めている」(für die Welt wach sein)ことであり、たえず現実的に、「世界とその世界の中に生きている自分自身」とを「意識している」ことであり、「世界の存在確信を真に体験し、現に遂行しているということ」である(VI, 145)。

世界は、その時どきの個々の事物が与えられているその与えられ方の中で、いつも「あらかじめ与えられている」。このときフッサールは、「世界意識」と、「事物意識」すなわち「対象意識」とのあいだにその意識の仕方において、原理的な区別が存することを指摘する。しかし他方では、この両者は分かちがたい統一をなしている。事物や対象は、われわれにとって、そのつど「存在確信の何らかの様相において妥当するもの」として与えられているが、しかしそれらは原理的に「世界地平のうちにある対象」として意識されるという仕方でのみ、与えられている。それぞれの事物はわれわれにたえず「地平として意識されている世界」に属する何ものか

²³ Vgl. Claesges, Ulrich, *Zweideutigkeit in Husserls Lebenswelt-Begriff*, S.95, 98-99.

²⁴ アギレの指摘するように、ここで生活世界の存在論的主題化と生活世界の超越論的現象学的反省との真の関係が打ち立てられており、超越論的現象学的反省は、存在論的反省と同様に存在者を取り扱うがゆえに、この反省を共に包括している。Aguirre, A.F., *Die Phänomenologie Husserls im Licht ihrer gegenwärtigen Interpretation und Kritik*, S.128.

である。他方、この地平は、「存在する対象に対する地平」としてのみ意識されており、特殊に意識された対象なしには現実的に存在しえない。世界という地平の性格にとって決定的なことは、世界は一個の存在者、一個の対象のように存在するのではなく、「唯一性」(Einzigkeit)において、すなわち「それに対しては複数が無意味であるような唯一性」において存在するということである(Vgl.VI, 145-146)。

この一般的な考察で、生活世界は存在者の宇宙、地盤、地平として性格づけられ、しかもそれは『イデーニ I』で論じられた「自然的態度の一般定立」の世界とされている。クレスゲスによれば、生活世界を主題化する仕方を反省するならば、生活世界を地平として規定する場合に主導的なのは超越論的観点であり、生活世界を総括として規定する場合に主導的なのは、存在論的観点である、ということがわかる。フッサールの生活世界の性格づけにはこの二つの観点が含まれている。したがって、クレスゲスは、フッサールにおいて、生活世界概念は、はじめから存在論的なものと超越論的なものが混ぜ合わされた混成概念(Zwitterbegriff)である、と主張する²⁵。

ここで第3章の終わりで持ち越した問題に取り組むことにしよう。われわれはヘルトの解釈によって、生活世界の多義性の問題を考えたい。ヘルトによれば、具体的に歴史的な包括的生活世界概念と直観地盤としての生活世界概念が対比されるとき、この二つの概念に矛盾はない。何らかの諸対象に関心をもつ実践はすべて生活世界をその普遍地平にもち、そしてそのようにして理解された「生活世界的実践」としていつでも生活世界の二つの側面の間の緊張のうちを動いている。一方の側面は「熟知」(Vertrautheit)という非主題的な地平を非主題的な仕方得意のままにすること(das unthematische Verfügen)である。この地平は諸対象を直接に直観的に与えられたものとしてわれわれに現出させる。包括的に歴史的に具体的な生活世界概念のこの側面は、より狭い意味での生活世界として、すなわち直観地盤として把握されるものである。これに対して、生活世界的実践のもう一方の側面は、より狭い意味での生活世界を「先取的・帰納的に - 脱 パースペクティブ化して踏み越えていくこと」(das antizipativ-induktiv-entperspektivierende Überschreiten)である。しかし、どのように踏み越えていっても、それはまた再パースペクティブ化(reperspektivieren)されるのであるから、生活世界はそのたびごとに直観地盤として樹立され、かくして恒常的にその性格を保持する²⁶。

ヘルトは、生活世界にいわば一見すると互いに矛盾するように思われる次の諸規定を認める。(1)生活世界は直観世界である。(2)生活世界は、直観を超越する実践をも含んだ、あらゆる実践の地平である。(3)生活世界は歴史的に変転しうる(すなわち、生活世界が歴史的実践の際になされよう、そのつどの脱パースペクティブ化に対して、あらかじめ与えられた非主題的な直観地平を形成する限りで)。(4)生活世界は超歴史的に恒存する(すなわち、主題的に獲得され

²⁵ Claesges, U., Zweideutigkeit in Husserls Lebenswelt-Begriff, S.97.

²⁶ Vgl. Held, K., Husserls neue Einführung in die Philosophie: Der Begriff der Lebenswelt, in: Gethmann, Carl Friedrich(hrsg.), *Lebenswelt und Wissenschaft. Studien zum Verhältnis von Phänomenologie und Wissenschaftstheorie*, Bonn 1991, S.108.なお地平が脱パースペクティブ化と再パースペクティブ化という互いに逆行する二つの次元のただなかに不安定な位置を占めることについては、クレスゲスがすでに指摘していた。Vgl. Claesges, U., Zweideutigkeit in Husserls Lebenswelt-Begriff, S.100.ヘルトの解釈はもともとクレスゲスがそこで唆していた点を展開させたものである。

たものが直観世界の非主題性の中で流れ帰る限りで)²⁷。ヘルトのこの規定によって、生活世界の多義性はさらに拡大されたのであろうか。これらの規定はすべて地平としての直観世界という、生活世界の側面を表わしていると見ることができるであろう。この観点から、クレスゲスが指摘した、生活世界が存在者の総括と考えられるか、それとも地平と考えられるかという問題に移ろう。この問題に関しては、結論を先に言えば、生活世界は地平であって、諸対象の総括ではない。ヘルトによれば、われわれは世界という端的に非直観的なものに直観という仕方では出会うことはできず、世界における諸対象だけに出会うことができるのである。世界は諸対象の総括ではなく、主観に相対的な、諸対象の現われ方、つまり普遍地平を意味する。生活世界が直観世界として表わされるとき、この直観的という特徴づけは諸対象の特定の部分領域を目指すのではなく、もっぱら諸対象一般の主観に相対的な現われ方のみを目指すのである²⁸。もちろん、フッサール自身が生活世界をあたかも諸対象の総括であるかのような誤解を招く言い方をしていたことは否定できない。こうして、ヘルトによれば、普遍的な具体性における生活世界は、唯一の包括的な世界、つまり自然的態度の存在信憑が関係している普遍地平である。自然的態度の世界は、いまや、そのうちで生じる実践とその沈殿、つまり流入によって、歴史的に豊かにされた世界となる。それは、具体的な歴史的世界なのである²⁹。

ここで行われた一般的考察は、超越論的現象学的反省であるが、アギレに従って、生活世界に関する超越論的な学と生活世界的存在論との関係をもう一度確認しておこう。超越論的現象学的反省のもっぱらの関心は現出(*Erscheinung*)へ向けられているが、その反省はその現出を「…の現出」として、その現出すること(*Erscheinen*)、自己呈示(*Sich-Darstellen*)における存在者として主題化する。だから存在者ないし、それを明るみに出す存在的世界の本質徴表、それゆえ意識の超越論的能作の構成物としてのその性格、したがって存在的世界のもつ単なる相関者の性格は存在論的な問題設定の可能性を超え出る。存在論は、生活世界的存在者の領域としての生活世界から主観的現象の領域としての生活世界へ立ち帰ることはできない。この立ち帰りは、超越論的な学が存在論の関心をそのうちに共に取り入れ、それと共に正当と認めるといようにして行われる。それゆえ、超越論的現象学への移行において、生活世界的存在論は単純に廃棄されるのではなく、超越論的現象学の問題設定と交差し続けるのである³⁰。

(3) 生活世界の存在論の課題と射程

フッサールは『危機』の51節で「生活世界の存在論」の課題をあらためて提出している。われわれはこのことの意味を考えてみたい。フッサールによれば、いままで述べてきたすべてのものの中には、「確固とした類型」(*feste Typik*)が支配している。そしてこれが学問性、すなわち記述や現象学的-超越論的真理を可能にするのである。そしてこの類型は、「純粋なアプリアリ」として方法的に把握されうる「本質類型」(*Wesenstypik*)である。ここで注目すべきことで

²⁷ Held, K., *Husserls neue Einführung in die Philosophie: Der Begriff der Lebenswelt*, S.108.

²⁸ Held, K., *Husserls neue Einführung in die Philosophie: Der Begriff der Lebenswelt*, S.111.

²⁹ Held, K., *Einleitung zu "Edmund Husserl, Phänomenologie der Lebenswelt (hrsg. von Klaus Held.)"*, Stuttgart 1986, S.52.

³⁰ Vgl. Aguirre, A.F., *Die Phänomenologie Husserls im Licht ihrer gegenwärtigen Interpretation und Kritik*, S.128.

あると共に、哲学的にきわめて重要なことは、このことが、「あらゆる相対性を通じて、しかも統一体として構成される生活世界および生活世界的対象の宇宙(Universum)」という題目にもかかわる、ということである。この本質類型は、本来的には、あらゆる超越論的関心をぬきにしても、すなわちいわゆる「自然的態度」(エポケー以前の素朴な態度)においても、「まったく経験の世界としての生活世界(すなわち、現実的および可能的な経験的直観において統一的に首尾一貫して、調和的に直観しうる世界)の存在論」という固有な学の主題となりうるのである。そして、これまでつねに「超越論的エポケー」という態度の転換の中で体系的省察が遂行されてきたが、再び自然的態度を回復することがいつでも可能であって、この自然的態度のままで生活世界の不変的構造を問うことができるのである(Vgl. VI, 176)。ここでこれまでフッサールが述べてきたことが繰り返されている。アギレによれば、生活世界の存在論は生活世界のアプリオリな構造を究明するが、超越論的現象学は存在論を包括しているがゆえに、生活世界のアプリオリな構造を解明することができる³¹。その際、超越論的態度から自然的態度へ戻ることもでき、この自然的態度で生活世界のアプリオリを研究することは可能である。

以上のように、フッサールは「自然的地盤に立つ生活世界の存在論、「超越論的関心の地平の外にある生活世界の存在論」の可能性と意義を認めた(VI, 176)。その上で再び、フッサールは、「超越論的態度」、「エポケー」に立ち帰る。そうするとここからわかることは、生活世界は超越論哲学の連関においては、「単なる超越論的現象」へと変化する、ということである。そこにあっても、生活世界は、その固有の本質においてはそれが以前にあったとおりのままであるが、しかしまや、いわば「具体的な超越論的主観性」の中の単なる「構成要素」であることになり、それに応じてそのアプリオリは、「超越論的なもの」(Transzendentalität)のもつ「普遍的アプリオリの中の一つの層」ということになる。エポケーの内部では、われわれはその眼を首尾一貫して、この生活世界へ、したがってまたそのアプリオリな本質形式に向けることができる。他方、視線をしかるべく向けることによって、生活世界の事物ならびに事物の形式を構成している相関者、すなわち、与えられ方の多様性とその相関的な本質形式に自由に眼を向けることもできる。しかし、さらにまた、これらすべての中で作動している主観と主観共同体へ眼を向け、それらに帰属している自我的な本質形式を追究することも重要である。これらの互いに基づき合っている部分的態度の交替において—その際、生活世界的現象へ焦点を合わせる態度が、出発点として、すなわちより高い段階の相関的態度に対する超越論的手引きとして役立つはずである—、超越論的還元という普遍的研究課題が実現されるのである(VI, 177)。

生活世界の存在論は、超越論的に考察することができると同時に、自然的態度においても考察可能である(Vgl. VI, 176)。生活世界の存在論と超越論的現象学との関係には、自然的態度と超越論的態度の相互の往復や、自然的態度で研究された生活世界の存在論の成果が超越論的に根拠づけられることも含まれているであろう。生活世界は諸学や実践の成果によって豊かにされ、それがさらに生活世界の存在論の内容に反映される。しかし、生活世界の存在論は生活世界のアプリオリを独自に自然的態度で研究すると共に、超越論的な根拠づけをも必要とするで

³¹ Aguirre, A.F., *Die Phänomenologie Husserls im Licht ihrer gegenwärtigen Interpretation und Kritik*, S.130.

あろう。

おわりに

ラントグレーベが簡潔に述べているように、現象学は生活世界という、われわれに対する具体的世界の存在というこの自明なものを、その世界がわれわれに対して存在する仕方において解釈し、分析するという課題をもつ³²。われわれは、生活世界を主題化する超越論的現象学が生活世界の存在論の課題を引き受けることを論じた。その際、生活世界の存在論は自然的態度のままでも研究可能であることをフッサールは認めていた。生活世界の存在論は、現実世界の具体的存在論であろう。このとき、経験諸学は生活世界の存在論にさまざまな仮説や理論を提供しうるはずである。ここに広く哲学と諸学問との協働が成り立つ可能性があるであろう。

ヘルトの言うように、フッサールは『危機』において、超越論的現象学への最後の導入のために、近代科学の姿勢に対する批判を通していく道を選んだ。そこで示されたように、哲学の主題は、主観に相対的な、歴史的に豊かになっていく普遍地平としての、つまり生活世界としての世界である。このように解された世界は、近代の客観主義的な研究実践において忘れられている。超越論哲学は反省に基づいており、それは、世界がそれにとって現出するような、責任ある主体への省察である。世界に対する科学化された態度は、地平意識の主観相対性と共に、この主体をも忘れてしまっている³³。クレスゲスはその生活世界の理論において、その理論に、科学の客観主義によって生活世界の忘却が起こることを診断する機能だけでなく、その危機の治療的機能をももたせようとした。彼はその治療的機能を、超越論的現象学として普遍的責任に基づいた生を可能にするはずの、徹底した自己省察への跳躍台を差し出すことに見ている³⁴。われわれは責任ある反省の主体として、科学の客観主義によって忘却された具体的な生活世界を省察する課題を負わされているであろう。

³² Landgrebe, L., *Lebenswelt und Geschichtlichkeit des menschlichen Daseins*, in: Bernhard Waldenfels, Jan M. Broekman and Ante Pažanin (hrsg.), *Phänomenologie und Marxismus. Band 2: Praktische Philosophie*, Frankfurt am Main 1977, S.15.

³³ Held, K., Einleitung zu "Edmund Husserl, *Phänomenologie der Lebenswelt* (hrsg. von Klaus Held.)", S.52

³⁴ Claesges, Ulrich, *Zweideutigkeit in Husserls Lebenswelt-Begriff*, S.86.